

# 論文内容の要旨

放送大学大学院文化科学研究科  
文化科学専攻人文学プログラム

2014年度入学

(学生番号) 142-800005-3

ほりいけいこ  
堀井恵子

## 1. 論文題目

学士課程教育におけるアカデミック・ジャパニーズ(AJ)・ビジネス日本語(BJ)教育の意義と課題

## 2. 論文要旨

本研究は、「アカデミック・ジャパニーズ」(以下、AJ)教育と「ビジネス日本語」(以下、BJ)教育が大学における学士課程教育において有する可能性を検討することを目的とした。

第1章では、2002年の「日本留学試験」で登場したAJと、2006年の「アジア人財資金構想」に盛り込まれたBJの、発端から現在に至るまでの状況を振り返り、カリキュラムやそれぞれの理念的な面をめぐる研究的背景を概観した。AJ教育、BJ教育はともに、留学生の日本語教育として始まったが、留学生向けのスキル教育としての面に留まらず、論理的・批判的思考力や他者との協働的遂行力を涵養する側面がある。学士力・社会人基礎力の育成に寄与することで、学士課程教育全体にもたらす意義と課題があると考えられるにもかかわらず、そうした観点からアプローチする研究がないことを指摘した。研究課題としては、AJ教育、BJ教育の現状を把握して課題を抽出するとともに、AJ教育、BJ教育それぞれに期待される成果を具体的・实际的に探ることを

通して、それらが大学の学士課程教育に対しどのような貢献をなし得るか考察した。研究方法は、先行研究の概観・レビュー、大学の教育担当者への質問紙調査を通して、課題を明らかにした後、AJ、BJ 教育実践における学習者の振り返り記述を分析し、考察、結論を導いた。

第 2 章では、これまでの AJ、BJ に関する先行研究を概観し分析を行った。網羅的なレビューを行ったところ、AJ、BJ ともに研究の始まりでは、それまで問われて来なかった AJ、BJ 教育の理念が議論されているが、その後はどちらも日本語教育の研究領域の 1 つとなっているにもかかわらず、実践報告やスキル習得の方法をテーマとする研究が多く、なぜ AJ、BJ 教育が必要かという AJ、BJ の意義を問うものがないことが把握された。そこで、先行研究において、AJ、BJ 教育の構成要素として言及されている項目をキーワードとして抽出したうえで、具体的な項目(スキルなど)、目標となる抽象的な項目、それらをつなぐブリッジ項目に分類し、ブリッジ項目に鍵があるのではと考察した。

第 3 章では、AJ、BJ 教育の現状を把握することが必要との認識に立ち、現に AJ や BJ が科目として提供されている大学の教育担当者への質問紙調査を行った。教育担当者の回答からは大学で学ぶための基礎的能力が大学入学以前にはほとんど身につけていないことから AJ 教育が必要であること、社会へのトランジション(移行)として BJ 教育が必要であることが了解された。また、AJ においては、論理的思考、批判的思考、問題発見解決能力、BJ においては、協働遂行能力、問題発見解決能力が涵養されるべき能力や活動のキーワードとして抽出された。自律的学習、アクティブラーニングがそれらを支えるものとして抽出された。これらのキーワードは第 2 章のキーワード分析でブリッジ項目として分類された要素と重なることがわかった。そして、単なる言葉の教育、コミュニケーションの教育を越え、よりよく生きるための教育として大学教育の中で日本人学生も含めた、AJ、BJ の両教育のアーティキュレーション(接続)の意義も認識された。一方、どちらもアクティブラーニングが必要であるが、それに対応できる教員が十分でないことから教員の資質不足、教員不足が課題として浮かび上がった。これらから、学部やコース・専攻等において設定さ

れている目標や理念などの抽象度の高い次元と、学習項目として教育され習得されるスキルなど具体性の高い次元とが、接続されないまま乖離していることが、大きな課題の一つであるとの認識に至った。そこで、両次元を接続して乖離を埋めるところに、大学教育課程における AJ、BJ の意義を見いだせるのではないかとの洞察を得た。それを受け、続く 2 つの章では、それぞれ AJ 教育、BJ 教育によって涵養される、いわばそれらの目的と言ってもよい能力が何であるかを考察した。

第 4 章では、日本人を主とするゼミにおける卒論までの AJ 教育実践としての学習活動を検討した。学生自身による多量の振り返り記述を縦断的に分析した結果から、知識、スキルの習得と合わせ、論理的思考力、批判的思考力、問題発見解決能力の意識化が明瞭に観察された。これまで、AJ 教育については、大学の初年次教育として行った後はほとんど行われてこなかったが、本来の AJ 教育は初年次だけではなく、その後の大学教育の中で展開されることでこそ、真に習得されるものであるとの認識も得られた。

第 5 章では、BJ について、PBL(プロジェクト型学習)を用いた複数の教育実践を検討した。学生自身による振り返り記述の分析結果から、協働遂行能力や問題発見解決能力の意識化が見て取れた。AJ、BJ によって育成されるこうした能力は、具体的なスキルの次元でもなく、また抽象的・専門的な目標や理念の次元でもなく、教育実践の活動を通じて習得されそれらを橋渡しするものとして、「活動・能力(Activity-Ability)」と名付けるのがふさわしいと考えた。AJ、BJ 教育の核心をこの次元に見るならば、留学生のみならず広く大学課程教育を通じて提供される意義があるとの洞察が得られた。

第 6 章では AJ と BJ の、また初年次教育や専門教育と AJ、BJ との、「アーティキュレーション(接続)」についての検討と、そうした接続の中で AJ、BJ 教育を担う教師の資質についての検討を行った。AJ 教育で身につけた論理的思考・批判的思考による問題発見解決能力を用い、BJ 教育で身につけた他者との協働遂行能力で問題を発見し解決する行動力を育むことで、活動・能力(Activity-Ability)を軸として、AJ と BJ を学士課程教育の中で体系的に

位置付けて展開することには大きな意義があると考え。しかし、AJ、BJ 教育を担当する可能性の高い日本語教員の多くが、専門教育をも担当することが少ないことから、初年次教育や後年次教育において、専門教育と AJ、BJ 教育のアーティキュレーションが必要であるにもかかわらずその実現はなかなか難しい。また、現職日本語教師研修における受講生の振り返り記述を分析した結果、AJ、BJ の教育に欠かせないアクティブラーニングや PBL を取り入れた教育実践の可能な教師が、圧倒的に不足している現状が見えた。アーティキュレーションの実現と AJ、BJ 担当教員の養成は今後の課題となる。

最後に、これまでの各章の振り返りから以下を抽出した。

- ・ AJ、BJ 教育が学士課程教育における広義の言語教育に資するためには、AJ、BJ の具体的項目(知識・スキルなど)の学習だけでは十分ではない。主体的な活動によって涵養され具体と抽象を橋渡しする活動・能力 (Activity–Ability) の習得が必要である。
- ・ AJ の活動・能力 (Activity–Ability) には論理的思考、批判的思考が、BJ の活動・能力 (Activity–Ability) には協働遂行能力などが挙げられる。AJ、BJ 共通の活動・能力 (Activity–Ability) としては問題発見解決能力が挙げられる。大学の学士課程教育における専門教育と並行した広義の言語教育として、論理的思考、批判的思考、協働遂行能力、そして、問題発見解決能力などの活動・能力 (Activity–Ability) を育成することが可能な点に AJ、BJ 教育の意義がある。

これまで、AJ 教育も BJ 教育も、学習項目となる知識やスキルに注目がいきがちで、その核心である活動・能力 (Activity–Ability) への焦点の当て方が十分ではなかったが、活動・能力 (Activity–Ability) 次元の重要性を再確認し、最も広義の言語的能力として AJ、BJ 教育は学士課程教育に組み込まれる価値を有するものと結論づけた。

ここで、本研究の限界を 2 点述べる。まず、ある教育の効果や優れているこ

とを論じる場合、教育によって何が身についたかを、テストなどによる量的な数値指標で測ることで、客観的な根拠とすることが見られるが、本研究では、知識でも、スキルでもない活動・能力 (Activity-Ability) と名付けた力について、実践の記録を読み込むことによって論証を試みた。他の方法論を用いての検討は行っていないため、今後は他の手法や方法論を用いての研究が待たれる。また、学士課程教育に入れることの意義を説いたが、実現に向けて考えていくと生じてくるであろう大小さまざまな課題があることは、ここでは論じていない。

これまでの学士課程教育では、外国語科目におけるスキル、教養科目における基礎知識、専門科目における専門知識といった具合に、スキルや知識の習得に比重が置かれてきた一方、それらを活用し実践につなげていくための広義の言語能力をめぐる議論は明らかに不足している。しかしながら、学士課程の目標として掲げられる学士力・社会人基礎力の習得には、知識やスキルにとどまらない能動的かつ創造的な能力が不可欠となる。そのためには、論理的思考・批判的思考、他者との協働遂行能力、そして、問題発見解決能力を体系的に身につけることが肝要なはずだが、現行の学士課程教育にはその受け皿が見当たらない。AJ 教育、BJ 教育とは、まさにそこを補って担うことのできる広義の言語教育であると考えられる。

知識やスキルではない活動・能力 (Activity-Ability) の育成には、アクティブラーニングによる主体的(自律的)・経験的な学びが求められる。そのための教員のパラダイムシフトや教員養成についてさらなる検討が必要である。門倉(2006)は、日本語教師が、日本語を総合的にとらえられる(教育内容)、インタラクティブ(相互作用)な教授法に習熟している(教育方法)、異文化間コミュニケーションをふまえる(教育姿勢)、の 3 点において優れていると述べているが、日本語教師の専門性を高め活用することに可能性が見いだせないだろうか。日本語教育の分野・視点であるからこそ、大学教育、そして、社会について、見えることがあるのではないだろうか。ひきつづき、この視点から、研究と実践を続けていきたい。

参考文献

門倉正美(2006)「〈学びとコミュニケーション〉の日本語力アカデミック・ジャパ  
ニーズからの発信」『アカデミック・ジャパニーズの挑戦』ひつじ書房、3-20

# Abstract

The School of Graduate Studies,  
The Open University of Japan

Keiko HORII

## Academic Japanese (AJ) and Business Japanese (BJ) Education in the Undergraduate Program: Significance and Challenges

This research's objective is to examine the potential of Academic Japanese ("AJ") and Business Japanese ("BJ") education in university undergraduate programs.

Chapter 1 provides an overview of the background and evolution of curricula and conceptual aspects of Academic Japanese and Business Japanese programs from their inception to today – AJ first appeared in the Examination for Japanese University Admission for International Students in 2002, and BJ was included in "The Asian Talent Fund Plan" in 2006.

Originally, AJ and BJ education started as Japanese education programs for foreign students, but they have the potential to promote logical and critical thinking, collaboration with others, and execution capabilities that are applicable to students beyond foreign students. There has not been much research focusing on the broader implications of AJ and BJ education for overall undergraduate programs, despite their impact on the development of foundational capabilities among undergraduate students. Therefore, the research question was designed first to understand the current situation of the AJ and BJ education and their challenges, and then to examine what kind of contributions they can make in university undergraduate programs by analyzing

expected outcomes of AJ and BJ education concretely and practically. The research used the following methodologies: First, it identified issues by reviewing past literature and conducting questionnaires of university educators; then, it analyzed reflection descriptions by students in AJ and BJ programs; and finally it drew implications and conclusions.

Chapter 2 analyzes the past literature related to Academic Japanese and Business Japanese. The comprehensive literature review revealed that there has been little research questioning the significance of AJ and BJ and why such programs are needed. In the early days of AJ and BJ research, there were discussions on the philosophy of AJ and BJ education. Since then, however, a large portion of the research has focused on reports of practices and approaches to skill building, despite the fact AJ and BJ are both recognized as components of the research field of Japanese language education.

Based on the realization that the current situation of AJ and BJ education needs to be further clarified, Chapter 3 discusses the results of the questionnaires sent to the educators in universities where AJ and BJ programs are offered. The questionnaire responses led to a conclusion that AJ education is necessary because most students start universities without possessing the necessary foundational capabilities to study at the university level, and that BJ education is necessary for the social and working life. In addition, several key elements were identified as necessary capabilities and activities – for AJ, the keys are logical thinking, critical thinking, and problem identification and solving capability; for BJ, they are teamwork, collaborative execution capability, and problem identification and solving capability. Key enablers for such capabilities are self-directed learning and active learning. Furthermore, the analysis identified the importance of articulation (connection) for both AJ and BJ education to go beyond the education of words and communication and enable students, including Japanese students, to have a better life. In addition, while both AJ and BJ require active learning, the research identified the lack of teachers who can support such learning, in terms of both capabilities and quantity.

One of the major issues is that there is a disconnection between the abstract level of objectives and guiding principles outlined in undergraduate and

course / major descriptions, and the concrete level of specific skills to be acquired as learning subjects. Therefore, the insight was drawn that a unique contribution to AJ and BJ education in university undergraduate programs can be made by connecting these two levels and filling in the gap. The following two chapters closely discuss capabilities to be developed through the AJ and BJ education.

Chapter 4 examines the learning activities of primarily Japanese students in seminars who put into practice Academic Japanese for their graduation theses. A longitudinal analysis of a large volume of reflection descriptions of these students led to the observation that they had developed an awareness of greater logical thinking, critical thinking, and problem identification and solving capabilities, in addition to knowledge and skill acquisition. Academic Japanese education has been conducted as a first-year program in universities, but this finding led to a recognition that AJ education should take place during the first year and throughout undergraduate programs.

Chapter 5 explored several education practices for Business Japanese using project-based learning (PBL). An analysis of reflection descriptions by students identified that they had developed an awareness of greater collaborative execution capability and problem identification and solving capability. These capabilities developed through AJ and BJ education are neither at the concrete skill level nor at the abstract/technical goals and guiding principles level, but rather they are critical capabilities developed by putting into practice in education. I term such new capabilities “Activity–Ability.”

Chapter 6 examines the articulation (connection) between AJ and BJ, between first-year education, specialized education and AJ / BJ, as well as the qualification of the teachers who are responsible for AJ and BJ classes. I believe it is important to position AJ and BJ systematically within undergraduate programs by anchoring them around the Activity–Ability that are developed through logical thinking, critical thinking, and problem identification and solving capabilities fostered through the AJ education. I also believe that it is necessary to cultivate collaborative execution capability and problem identification and solving capability developed through BJ. However, it is difficult to ensure good articulation between specialized education and AJ / BJ education in the first or subsequent years of university education because most Japanese teachers

who are likely to teach AJ / BJ courses are not teaching specialized courses. Furthermore, an analysis of reflection descriptions by the teachers of Japanese as a second language revealed that there is a drastic shortage of teachers who could lead active learning and project-based learning that are critical to AJ / BJ programs. Articulation of AJ / BJ and development of teachers are important issues for the future.

Lastly, I have drawn the following key findings from the summary of each chapter:

- To make AJ and BJ relevant to a broader definition of language education in undergraduate programs, it is not sufficient to learn knowledge and skills for AJ and BJ. Students need to learn the Activity–Ability that are necessary to bridge the concrete skills and abstract concepts.
- AJ requires logical thinking and critical thinking Activity–Ability; BJ requires collaborative execution capability as an important Activity–Ability. For both AJ and BJ, problem identification and solving capability is needed. AJ and BJ are important in undergraduate studies for the development of Activity–Ability such as logical thinking, critical thinking, collaborative execution capability, and problem identification and solving capability, to be pursued in parallel to specialized education.

In the past, both AJ and BJ education tended to focus mainly on knowledge and skills as learning items, and little attention was paid to the core significance of Activity–Ability. This research confirmed the importance of Activity–Ability and concluded that AJ and BJ education is relevant and should be integrated as part of broadly defined language education in an undergraduate program.

There are two limitations to this research. First, it is common to provide objective and quantitative evidence such as test results to show what students have learned in education when making a case for a superior education approach. This research demonstrates impact through the analysis of the records of what I term as Activity–Ability, which are neither knowledge nor skills. This research does not use other methodologies to examine this point, and hence further research using different approaches and methodologies is needed. Moreover, while I argued for the significance of integrating AJ and BJ

into undergraduate programs, I did not discuss the potential challenges of implementing it.

Most undergraduate programs emphasize skills and knowledge acquisition such as foreign languages, liberal arts or specialized courses, and there is not sufficient discussion on the language capability that is needed to apply these knowledge and skills in practice. However, to realize the undergraduate programs' purpose of providing the foundation for university graduates, active and creative capabilities are necessary beyond knowledge and skills. Therefore, logical thinking, critical thinking, collaborative execution capability, and problem identification and solving capabilities become important, though they are lacking in current undergraduate programs. AJ and BJ education aims to complement this broadly defined language education.

To develop Activity–Ability that are different from knowledge and skills, a more proactive (self-directed) and experiential learning supported by active learning is necessary. This will require a paradigm shift among teachers and teacher development. Kadokura (2006) argued that Japanese language teachers excel in three aspects: ability to teach Japanese language holistically (education methodology), experience in interactive (reciprocal) pedagogy (education methodology), and inter-cultural communication (education attitude). I believe there is a potential to improve the expertise of Japanese language teachers and utilize their capabilities. A perspective from the field of Japanese language education could contribute to university education and society more broadly. I plan to continue further research and practice from this perspective.

Reference:

Kadokura, Masami (2006), "Japanese for Learning and Communication: Transmitting from Academic Japanese," *Challenges of Academic Japanese*, Hitsuji Shobo, 3-20.

# 博士論文審査及び試験の結果の要旨

## 学位申請者

放送大学大学院文化科学研究科

文化科学専攻人文学プログラム

氏名 堀井 恵子

## 論文題目

学士課程教育におけるアカデミック・ジャパニーズ (AJ)・ビジネス日本語 (BJ) 教育の意義と課題

## 審査委員氏名

- |                                    |       |
|------------------------------------|-------|
| ・主査 (放送大学教授 博士 (文学))               | 滝浦 真人 |
| ・副査 (放送大学教授 Ph.D. (Communication)) | 大橋 理枝 |
| ・副査 (放送大学教授 PhD)                   | 原田 順子 |
| ・副査 (常葉大学教授 博士 (文学))               | 清 ルミ  |

## 論文審査及び試験の結果

本論文は、日本語教育において展開されてきたアカデミック・ジャパニーズ (AJ) 教育とビジネス日本語 (BJ) 教育の意義と課題の検討を通じて、それらが大学の学士課程教育に対してなし得る貢献の可能性について考察したものである。

## 論文の構成と概要

論文は、以下のような6章構成となっている。

第1章	研究の背景・目的・方法
第2章	先行研究
第3章	質問紙調査による現状把握
第4章	AJ（アカデミック・ジャパニーズ）教育の実践と意義
第5章	BJ（ビジネス日本語）教育の実践と意義
第6章	考察と結論—学士課程教育におけるAJ、BJ教育の意義と課題

第1章では、2002年の「日本語留学試験」で登場した「アカデミック・ジャパニーズ」（以下AJ）と、2006年の「アジア人財資金構想」に盛り込まれた「ビジネス日本語」（以下BJ）の、発端から現在に至るまでの状況を振り返り、カリキュラムやそれぞれの理念的な面をめぐる研究的背景が概観される。研究背景として、AJ、BJには留学生向けのスキル教育としての面に留まらない、論理的・批判的思考力や他者との協働的遂行力を涵養する側面があるにもかかわらず、そうした観点から意義や課題を問うた研究がないとの問題提起がなされる。

その上で、上記のような研究目的・研究課題が設定され、研究方法として以下の諸点が述べられる。①先行研究のレビューからAJ、BJ教育の構成要素をキーワードとして抽出・分類する、②AJ、BJ教育の現状を大学の担当者を対象とした質問紙調査によって把握する、③筆者自身によるAJ、BJ教育実践における学生の振り返り記述の縦断的分析や、(BJについては)海外でのインタビュー調査結果の分析に基づいて考察する。

第2章では、まず、AJ、BJをめぐる先行研究がレビューされる。専門学会誌や博士論文、科研報告書などから大学の紀要類に至るまでかなり網羅的なレビューを行っても、実践報告やスキル習得の方法をテーマとする研究が大部分で、AJ、BJ教育の必要性や意義といった理念的側面を問うものはほぼ見出だせないことが確認された。このことは翻って、本研究の問題意識が持つ意義を傍証するものとなる。

その後、上記①に従い、AJ、BJそれぞれについて、先行研究からのキーワード分析がなされるが、それを分類する際、スキルなど具体的項目と目標としての抽象的項目、さらにその両者をつなぐブリッジ項目が、異なる次元に位置するものとして整理された点は、本研究の特徴の一つと言ってよい。また、ブリッジ項目として分類された「アクティブ・ラーニング」と「プロジェクトベースラーニング（PBL）」について、中教審答申を参照しつつその意義が確認された。

第3章では、AJ、BJ教育の現状を把握することが必要との認識に立ち、現にAJやBJが科目として提供されている大学の教育担当者を対象に行われた質問

紙調査の結果が分析・考察される。浮かび上がってきた現状における課題として、初年次の学生が大学で学ぶための AJ 的な基礎力を身につけていない実態や、就職活動を経て社会へと出て行くための BJ 的な基礎力を教えることの必要性、さらには、AJ 的な教育が「初年次教育」で提供されても、それと専門教育との接続が欠落しているために、ゼミや卒論といった後年次の専門教育で AJ 学習が生かされないといった問題が抽出された。アンケート結果から抽出されたキーワードには、前章のキーワード分析でブリッジ項目として分類された要素が並ぶこととなり、担当者の意識においてもブリッジ項目が重要視されていることが捉えられた。

これらの点も含めて、本調査からは、アーティキュレーション（接続）ということ自体が大きな鍵概念として浮かび上がってきた。学部やコース・専攻等において設定されている目標や理念などの抽象度と専門性の高い次元と、学習項目として教育され習得されるスキルなど具体性の高い次元とが、接続されないまま乖離していることも、大きな課題の一つであると考察された。そこで、両次元を接続して乖離を埋めるところに、大学教育課程における AJ、BJ の意義を見出させるのではないかと洞察された。

こうした洞察を受け、第4章と第5章で、それぞれ AJ 教育、BJ 教育によって涵養される、いわばそれらの獲得目標と言ってもよい能力が探索される。AJ に関しては、卒論までのゼミにおける学習活動の、学生自身による多量の振り返り記述を縦断的に分析した結果から、論理的思考力、批判的思考力、問題発見解決能力の意識化と学びが観察された。BJ については、PBL による教育実践における学生自身の振り返り記述を基に、協働遂行能力や問題発見解決能力の意識化と学びの跡が見て取れた。AJ、BJ によって育成されるこうした能力は、具体的なスキルの次元でもなく、また抽象的・専門的な目標や理念の次元でもなく、教育実践の活動を通じて習得されそれらを橋渡しするものとして、「活動・能力 (Activity-Ability)」と名付けるのがふさわしいと考えられた。AJ、BJ 教育の核心をこの次元に見るならば、留学生のみならず広く学士課程教育を通じて提供される意義があるのではないかとの考察が導かれた。

その後、第6章ではアーティキュレーション（接続）についての検討がなされる。初年次における AJ 的な教育は、専門教育やゼミにおいて活かされてこそ真の学びになると言え、他方、就職活動からの社会人基礎力を身に着けていく過程において BJ 教育が求められるという具合に、初年次教育～専門教育の展開の中に AJ、BJ 教育がそれぞれ組み込まれていくようなアーティキュレーションが浮かび上がってきた。他方で、そうした教育を担う教師の資質について検討すると、実際に行われた研修の振り返りから、アクティブラーニングや PBL を取り入れ

た教育実践の可能な教師が圧倒的に不足している現状も確認された。各章で得られた洞察の振り返りから、「活動・能力 (Activity-Ability)」の習得の重要性が再確認され、最も広義の言語的能力として学士課程教育に組み込む価値を有するものと結論された。

## 論文の評価

審査においては、以上のような内容の本論文に対して、長年の教育実践と研究活動に基づいた集大成として、大きな構想の成果であり十分な意義を持つとの評価がなされた。同時に、予備論文段階では、審査委員から以下のような指摘がなされていた。本論文での修正結果も併せて記す。

AJ、BJ 教育におけるアクティブラーニングの重要性は首肯できるものの、とりわけ BJ をめぐる議論で、BJ すなわち PBL と読めてしまうほどに両者を同一視するような捉え方がなされているとの指摘があった。ただプロジェクト型でありさえすればいいわけではなく、BJ というあくまで広義の「言語活動」に媒介され開花する能力としての位置付けを、より明確にすることが求められた。本論文では、第 2 章の最後でアクティブラーニングと PBL への注目が行われた際に、PBL と BJ の関係が論じられる形となった。

アーティキュレーション（接続）についても、「学士課程教育」と言うだけでは「接続」の内実が曖昧であるとの指摘もなされていた。この点については、第 6 章において、上述のように AJ、BJ を初年次教育／社会人基礎力と関係付けながら論じる流れに整理された。

論文の構成面では、第 6 章から 3 章構成で論じられていた、アーティキュレーション、人材育成論、「シニアサポーター」についての議論が断片的で座りが悪いことが指摘されていた。アーティキュレーションと教師の資質については上述の形で第 6 章に組み込まれ、「シニアサポーター」については BJ の教育実践における外部人材の活用に関わる話として第 5 章に組み込まれ、いずれも論の厚みと流れを作ることに貢献したと考えられた。

本研究が何を・どこまで行ったものであるかという「研究の限界」についても明示的に述べることが求められたが、本論文では、量的研究手法による検証の必要性なども記しつつ、本研究の意義を明確化する努力がなされているものと認められた。

審査会でなされた新たな指摘もあった。一つは、主張の学術性を直接担保する形式面に対する意識に関してで、例えば第 4～5 章で検討されるデータについて、用意された質問に対する回答ではなく自発的な記述である点に資料としての意義がある点は認めるとしても、議論の中で言及されるコメントが恣意的に

選択されていないことを明示する等、万全を期することが求められた。また、AJとBJが「活動・能力 (Activity-Ability)」の次元における多くの共通性を有することは理解するが、同時にかかなりの質的差異もあるからこそ、BJにおいて外部人材の活用といったことが行われたはずである点など、両者の差異についても明確にする必要があるとの指摘もなされた。

こうした要改善点の指摘はなされたが、本論文で全体の流れが改善され、現状調査と自身の教育実践記録に基づいた分析・考察による有用なAJ、BJ論となったとの認識を全委員が共有したことと、要改善点についても最終提出までに修正対応可能であるとの判断がなされたことから、それらの修正を前提として審査の結果を「合格」とすることで全委員の見解が一致した。

以上